

---

# 燈江組

しみちゃん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

燈江組

### 【ZPDF】

Z0636E

### 【作者名】

しみちゃん

### 【あらすじ】

平凡な女の子が、ある日突然、燈江組組長の娘になつた。

## 第1話 勘違いから始まった

私は今日、松見花音から、燈江恭子となつた。

数時間前

眠い目を擦り、用覚めた私が居たのは、見覚えの無い事務所だつた。

「iji…何処だ…？」

思わず叫ぶ。

確かに、昨日は家で寝てたはず…。

なのに起きた場所は、見知らぬ事務所。

こんな奇妙な事があるだろうか？  
もしかして、誘拐だらうか…？

そう思つとさつとした。

（謝り倒して、帰してもらおひ…）

ギイ  
…

ドアの蝶番が軋む音がした。

そして…一目で『ヤクザさん』と解る人が入つて來た。

（iji…殺される…！…）

そう思った矢先だった。

「お田覚めですかー！お嬢…！」

朝から近所迷惑な程の大声で『ヤクザさん』は叫んだ。

(え…何?てかお嬢つて…?え…??)

そして、何処に隠れていたのだろうか、大量の『ヤクザさん』が部屋に入つて来た。

「ええええええええええええええ！」

状況が全く理解出来ません

卷之二

えー… 今私の目の前にヤクザさんのボスらしき人が立っています。  
(やつぱり殺されるうう…!!)

は？

「恭子おー何で家出なんてしたんだあーーーお父さん悲しくてプロ  
ーケンハートだつたぞーーー！」

泣きじやぐるオッサンが私に抱き付いてきました。  
鼻水が服に付いたし、何よりこのオッサン、加齢臭がします。

「 もう、家出なんてさせないからなーー。」

どちら、私は『恭子さん』と勘違されたのです。

そして  
…

「お嬢おおおおおーーー！」

ヤクザの皆様も集つて来ました。

この状況からすると……私が恭子じやないって言つたら……『DEATH』ですか？

ちよつとちよつと……笑えない冗談なんですねどうおおおおおおおおーーー

前略 母上様。

私は極道と一緒に生活せねばならぬようです。

助けてください。

てか……まじで誰か助けるーーー！

私と、燈江組の皆との生活は、始まった。

## 第2話 恭子さん

今私は、とてもフランキーな部屋の中に居ます。

やつぱり、この若さで一生を終えたくないので、当分『恭子さん』になります事を決めました。（だつてまだ中一だもん。）

多分この部屋は恭子さんの部屋でしょう。

やつぱり女の子と畜生でもしかばうか、部屋がとても可愛い。  
(私の部屋なんて、まるで「ハリ潤めだよ…。）

恭子さんの机には、オッサン（組長さん）と撮った写真があった。オッサンがテレテレと笑っているのがキモかったけど、それ以上に驚いた事があった。

恭子さんと私は…全くと言ひて良い程、同じ顔をしていた。

「ええええええええええええ…？？」

本日三度目のビックリ。

ポケットに入れていた携帯を取り出した。

フルルル…フルルル…

何度かのホールの末、母は電話に出た。

『はい、もしも「母さん…？私つて双子…？…？』

『元気ね～、そんな訳ないじゃな～い。』

「てか、助けてよ…！！ヤクザの娘と勘違いされて困つてんだけど！…！…！」

『あら、やうなの～？でもヤクザさんって何だかんだ言つてお金持

ちでしょ？頑張つてWW

そう言つて母は電話を切つた。

六十九 もらおーーー

だれかHelp me!!

ブルルルル

卷之二

「花音ちゃん? お母さんね、仕事で『ランス』行く事になつたから、一年は帰らないと思つから~。じゃーね~」 プチ :

プロ

ふ・ぞ・け・ん・な・よおおおーーー

ちやうじゅ...泣いて良いですか?

「恭子ちゃん、

語尾にハートマークを飛ばしながらおつさんか部屋に入つて來た。

西へさう詠へて、モモイ。

果てしなくキモイ。

「キモいから近づくな」

やつべー…本音言つちやつた。  
私つて素直だよなあ。

我ながら感心するよ。

「ええ～。お父さんまたまたブローケンハートだぞお」

えー…『』つて。

まじk.i・m.o・i。

どん引きだよ…。

8月10日（晴れ）

組長のとおつさんが凄えキモかった。

恭子さんが家出したのも解る。

見知らぬ人物に初めて同情した。

でもこのままだとストレスではげそつなので、恭子さんに早く帰つてきてほしい。

### 第3話 私の一 日

「おせむり」じゃあねえか……お嬢……」

朝から迷惑ですよ、トシさん……。  
しかもまだ朝の5・30です……。

「お嬢！！朝です。起きてくださいせえええええええ！」

バンッ！！

「黙れやああああ！――まだ眠いねん！――寝かせろやあああああ

「そんなあ！－お父さんBroken heartだぞう－－」

卷之二

これから学校へ行つてきます…。

「おまえがうーーー！ 燐江さん」

誰だこいつ。

えーっと…今私は『恭子さん』が通学していた学校に通っています。本当に私は『恭子さん』と似ているらしく、誰も気付きません。でもばれやしないか…内心ドキドキです。

一時間目、数学。

だるこのでサボる事にしました。

一時間目、現国。  
わせります。

三時間目、科専。  
わせります。

ワオ わせりまくつ。

なんやかんやでお昼の時間。  
眠いので帰りました。

「お嬢……」こんなに早く帰つてくるなんてビックリしたんですか！  
！」

だからひるせえいつひの、トシ。  
いい加減声のボリュームトゲる。

「やんなあ……ヒドイ事言つてくれやあざ、お嬢。」

え、何？

今心読んだ！……？

「嫌だなあ……んな事出来るはず無いじゃないつすか。

いやこやこやこや。

確實に読んでんだろ手前。

「それよつお嬢……学校はびうしたんですか！……お…おやか虐め  
とかですか！……？主犯は誰つすか！……？殺してきやう「違うか

ら！…たるいからサボつただけだから！…！」

目が血走つてますよ、トシちゃん…。

「うるせええええええええええええ！」

サボつただけで何で乱心なんだよ…。

T<sub>1</sub>T<sub>2</sub>T<sub>3</sub>T<sub>4</sub>T<sub>5</sub>T<sub>6</sub>

h  
?

何かすつげえ嫌な予感

「恭子オオオオオオ！……学校をサボるなんトビハしたんだああああ！！！！！」

「唯ひうフノジ」

離れたケンリュウ！！！！

オッサンが抱きついて来たよ。

てが臭つ！！！

加齢臭がする。.

あ…ダメだ。

意識が

「……」で私の意識は途切れた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0636e/>

---

燈江組

2010年11月12日11時40分発行